京都大学	博士（文学）	氏名	福谷　彬
論文題目	道學の展開		

（論文内容の要旨）

從來、「道學」の語は程朱學の代名詞として用いられてきた。近年の道學研究では、朱子の時代の「道學」とは、廣く二程の門流の影響を受ける學派を指し、その中には朱子の論敵や、二程の批判者までも含んでいたことが指摘されている。「道學」とひとくくりにされるからには、一定の共通の枠組みがあることが想定されるが、彼らの共通の枠組みとは何であろうか。また、二程の學として形成されたはずの道學は、いかにして二程の批判者をも含む形で展開したのだろうか。

上記のような問題意識の下、本研究は、南宋の道學諸派の多様な思想展開の根底に彼らの經書解釋、特に『孟子』解釋があったことを解明する。ここでいう道學とは胡宏らの湖南學、呂祖謙・陳亮らの浙中學、陸九淵らの江西學、そして朱子らの閩學の總稱であるが、彼らは經典のなかでも『孟子』を重視する點が共通している。本研究はこの點に着目し、身分や職分に限定されることなく積極的に他者を教化していこうとする道學特有の經世精神は『孟子』を根據とするものであることを示した。のみならず道學諸派の論爭は彼らの『孟子』解釋と關わるものが多く、『孟子』解釋という視點が道學諸派の思想上の異同關係を分析する上で有効な視點として活用できることを主張した。

第一章「孔孟一致論の展開と朱子の位置―性論を中心として―」では、孟子と孔子の思想は一致していると見なす觀點(「孔孟一致論」と呼ばれる)の漢代から宋代に至る展開を考察した。『論語』は人の素質の差異を強調して説く一方、『孟子』は性善説を説き聖凡の共通性を強調しており、兩書には表面上大きな相異がある。本章は、漢代より宋代に至る孔孟一致論の展開とその變化について考察し、各時代の孔孟一致論者が、こうした『論語』と『孟子』の隔たりをいかに調停しているかという點を考察した。

その結果、得られた結論は、宋代以前の孔孟一致論者は、人の素質を差別的に説く『論語』の内容を主としつつ、萬人の向上の可能性を強調する『孟子』の内容をそれに整合的に取り入れようとしたのに對し、宋代以降の孔孟一致論者は、聖凡一致を強調する『孟子』の内容を主としつつ、向上心の上下に『論語』が説く差別性を見出す、ということである。特に道學の提唱者である程頤は、『論語』の「下愚」を、『孟子』の「自暴自棄」の人と解釋して『論語』の「上知・下愚」の一節を『孟子』の文脈で理解するという方法を提示した。更に、道學の集大成者朱子になると、『論語』に實踐を見出し、『孟子』にその理論を見出すことで、兩書の内容的な隔たり

を、思想の違いとしてではなく説明の仕方の違いとして處理するという巧みな調停をおこなった。程頤・朱子のこのような方法を支えているのは道學の特徴的な考え方である道統論である。道統論とは、孔子の正しい教えは曾子・子思を經て孟子に傳授されたのであって、孔孟兩者の思想はもともと一貫していると考える思想である。この思想は、後發の『孟子』の思想内容を先行する『論語』に遡及させるという、本來無理な解釋を可能にする畫期的な論理を提供しているのである。

以上のような、聖凡一致を強調する『孟子』の人性論が、道學の「聖人學んで至るべし」のスローガンへと繋がっていく。しかし、實際には『孟子』に限らず儒教文獻は明確に「聖人に至る」ための修養法を説いていない。そのため、二程門流は様々な經書の記述を繋ぎ合わせて修養法を構築しなければならなかった。

第二章「胡宏と朱子―その相違の原點としての孟子解釋―」では、湖南學の領袖的存在だった胡宏の『知言』の思想を經書解釋という側面から考察した。

湖南學の工夫論である察識端倪説とは、日常の人倫において心に發現した善性を察知する工夫である。經書解釋という觀點から見れば、この工夫論は、『孟子』の四端章(公孫丑上)で説かれる四端の知覺と牛山章(告子上)で説かれる良心の知覺とを、同じ工夫の實踐と見なしてその内容を結合するという方法で成立している。また、胡宏は、先に知覺して後に實踐する、という知先行後の工夫論を説くが、これも『孟子』の四端章の記述と牛山章の記述に基づく。一方、朱子は、牛山章が説く「良心」の知覺を、倫理的な心の知覺ではなく、主體としての意識を確立する本心把持の工夫と位置付けており、四端章の内容と峻別する。道學固有の意味では工夫論とは經書の記述の追體驗という意味を持つ。朱子の胡宏批判は、經書解釋が異なれば、實踐者にとって異なる體驗となると朱子が考えていたことを意味しているのである。從來、朱子の工夫論と胡宏の工夫論とは内容的には異ならないとされてきたが、胡宏の工夫論に對する朱子の批判の基底にはこのような經書解釋の違いがあったことを重視すべきだと考える。

また、胡宏は、天理と人欲に關して「天理人欲、同體異用」と説き、同じ心であっても、 對處次第で天理にも人欲にもなる、と説く。これは、『孟子』において「情、才、欲、術、憂、怨」はいずれも衆人だけでなく聖人も有するものとして説かれ、さらに正しく對處することで王道のきっかけとなるとも説かれていることに基づく。このように、胡宏の學説には『孟子』を獨自に解釋したものとして捉えるべき點があることを論じた。

以上のような胡宏の學説に對する批判を通じて、朱子は定論を確立して南宋思想界における不動の地位を築くわけであるが、こうして思想界の一大權威となった朱子に對して挑戰者として敢然と立ち向かったのが、第三章で論ずる陳亮と、第四章で論ずる陸九淵である。

第三章「陳亮の「事功思想」と孟子解釋」では、朱子と「義利・王霸の辨」論爭を行った陳亮の思想を扱った。「事功」主義とは朱子が陳亮に向けて放った批判である。義利・王霸の語は『孟子』を典據とするが、『孟子』は一般的に、結果や利益よりも動機や道德性を重んずる思想家と見られている。一方、陳亮の思想は事功主義あるいは「功利主義」とも評されるように、動機の善惡よりも功利の大小を重んずる思想と見られがちである。それゆえこれまでの研究では陳亮思想を『孟子』の思想と對立するものとみることが多かった。しかし實際には陳亮は若年から晩年に至るまで『孟子』を尊崇する文章を書いており、しばしば『孟子』を典據として持論を展開している。本章では、彼の『孟子』理解という視角から、執筆時期を異にする諸著作を分析した。

その結果、陳亮は、自分を含めた萬人の利益を求めることを「義」、自分の利益のみを求めることを「利」と考えている、という結論を得た。これに對して、朱子は、為めにする所が無い動機の純粹さを「義」、利益を求めて打算することを「利」と捉えた。朱子は、打算としての「利」の心を消し去ることで、止めようとしても止められずに發する道德的な心としての「義」が殘ると考えるが、陳亮は、自分だけでなく萬人の「利」を求める公共性がすなわち「義」であると考えるのである。このように、朱子と陳亮とでは、「義」と「利」に對する價値判斷以前に、「義」と「利」の語に對する理解が異なることを明らかにした。また、利益の公共性を中核とする陳亮の義利觀は、王道政治を行えば多くの治績が擧げられると言って為政者を説得した『孟子』の記述を根據とすることを論じた。

以上のことから、あくまでも自分の利益を求める心を出發點とする陳亮思想は、萬人の利益のために打算することを奬勵するという點に特色があり、その考え方は、朱子とは異なる『孟子』解釋の可能性を示していると結論した。

第四章「淳熙の黨爭における陸九淵の立場―「荊國王文公祠堂記」をめぐって―」では 陸九淵の政治的立場と心學思想の關係性を考察した。陸九淵は自ら孟子の後繼者を自任した思想家である。先行研究では、陸九淵は思想的には朱子と對立したが、政治的には道學彈圧の風潮の中で共闘關係にあったと指摘されてきた。本章は、そうした指摘を引き繼ぎつつも、朱陸の思想上の對立と、政治上の協調關係とはどのように關わるのか、という點を考察した。

このために本章が注目したのは、陸九淵の「荊國王文公祠堂記」である。この著述は王安石評價に關する著述であるが、この中で、陸九淵は彼自身が直面していた淳熙末年の黨爭を、北宋の王安石の頃の新法黨と舊法黨の黨爭に重ね合わせている。淳熙末年の黨爭とは、朱子の唐仲友彈劾を契機として勃發した道學派と反道學派の黨爭のことを指す。陸九淵は當初朱子の彈劾を絶贊していたが、事態の展開のなかで次第に自分も屬する道學派陣營に對しても批判的な發言を發するようになる。本章では、

「荊國王文公祠堂記」を記した頃の陸九淵が當時の黨爭状態をどのように見ていたかを考察し、また同じ時期に陸九淵が朱子と繰り廣げていた無極・太極論爭の内容も合わせて分析した。その結果、「荊國王文公祠堂記」での王安石批判と書簡中に記される黨爭に對する見解、さらに無極・太極論爭での陸九淵の主張には一貫したテーマがあることが判明した。それは、自分の考えを絶對的に是として、異論を認めず他者に同調を迫る態度は、他者の反發を招くばかりで、眞に他者を教化することはできない、ということである。このことから、「荊國王文公祠堂記」の内容には、黨爭を泥沼化させる現代の王安石としての朱子批判の意圖があったことがわかるのである。また、朱子がこの黨爭時期に、二度にわたって、朝廷内の「小人」を排斥すべしと皇帝に訴えたのに對し、陸九淵は、道學派が徒黨を組んで反道學派に對抗している状況を憂慮し、反道學派を彈劾して朝廷から放逐することに明け暮れるのを批判している。のみならず、陸九淵は無極・太極論爭で、他者を論破して自説に從わせるのではなく、自己と他者が共通して持っている「本心」に働きかけて説得することの必要性を説く。これは朱子や王安石に共通する他者に同調を強要する議論法に代わるものとして、『孟子』解釋に基づく自分の「本心」論による議論法を打ち出したものに他ならない。

以上のことから、同じ道學陣営に屬するとみられていた朱子と陸九淵の間には、反道學派を徹底的に放逐するか(朱子)、説得・融和を目指すべきか(陸九淵)、という路線の相違があり、その相違は朱陸の思想上の違いが政治方面にまで及んだものだったと考えられる。

第一章から第四章までは、道學者による孔孟の思想の繼承、つまり道統論に關わる考察である。道學では思想的正統性を考える道統論の他に、政治的正統性を考える正統論がある。この正統論に關わる研究が以下の第五章である。

第五章「『資治通鑑綱目』と朱子の春秋學について―義例説と直書の筆法を中心として ―」では、朱子が編集した歴史書『資治通鑑綱目』を考察した。『綱目』は、司馬光の『資治通鑑』の體例や筆法に不滿を持った朱子が、大義名分上の觀點から『通鑑』を修正・改訂した編年體の歴史書である。朱子は『春秋』に對して注釋を遺さなかったが、『綱目』 の「綱」は『春秋』の筆法に基づいて記述しており、そのことから、『綱目』は朱子の春秋學の成果とみなされている。しかしながら、これまで朱子の春秋學の内容と『綱目』の内容には大きな齟齬があると指摘されてきた。朱子は『春秋』の義例や孔子の一字褒貶の存在を否定し、孔子は事實を直書したのみである、と考えていた。他方で、朱子は『綱目』で膨大で綿密な「凡例」に基づいて、多くの褒貶が現れる筆法で歴史を記述した。本章は、朱子の春秋學と、『綱目』の凡例や褒貶に對する見解の二方面に對してそれぞれ再檢討を加えた。

まず、朱子は義例説を否定した、といっても、それは義例の内の例外的な規則であ

る「變例」の存在を否定したのみで、一般的な規則である「凡例」の存在については認めていたのである。また、朱子が提唱する「直書」とは、記録した史實に道德的評價が現れることを否定するものではなかった。
次に、『綱目』における褒貶の現れる記述は、朱子が自分の判斷で『通鑑』の文字を改めて褒貶を加えたのではなく、「凡例」に基づいて書かれたものだったのである。そしてその「凡例」の内容も、朱子が獨斷で作ったものではなく、『通鑑』や『通鑑』に先行する史書の書法を取捨して集成したものであった。以上のことから、『綱目』における褒貶の現れる記述とは、朱子の意圖としては、歴史記述者が自らの價値觀によって原史料の文字を改める「一字褒貶」ではなく、「直書」のつもりで記述したものであると結論付け、朱子の春秋學の成果としての『綱目』の實相を明らかにした。

結論部では「道學の展開」の全體像を俯瞰する考察をおこなった。道學の四派の思想を總觀するならば、道學の象徴とされる朱子はむしろ道學の展開のなかでは特殊な存在であるという意外な點を指摘しなければならない。それはなにより、天理と人欲の關係の捉え方において著しい。胡宏・陳亮・陸九淵はいずれも、「人欲」の適切なあり方(適切さのあり方にはそれぞれに特色があるが)に「天理」を見出しているのに對し、朱子だけが「天理を存して人欲を滅ぼす」ことを強調し、「天理」と「人欲」を二律背反的に相容れないものとして捉えるのである。

また、道學諸派の思想的相互關係についても、これまでのような朱子を中心とする構圖とは異なる見方が可能だと思われる。朱子は、陳亮は治人に偏り陸九淵は修己に偏っていると見なし、自己を中心として對照的に位置付けていた。しかし、本研究で行われた考察によれば、陳亮と陸九淵には思想的に共通點があり、むしろ朱子が特異な位置にあると見ることができるのである。

（論文審査の結果の要旨）

「道学」の研究は、土田健次郎氏が、従来道学を考える際に、朱子を中心とする見方に偏っていたことを指摘し、新たな研究の領域を開拓して以来、近年大きく発展した。論者は、この土田氏の業績にもとづきつつ、胡宏や陳亮といった南宋の思想家たちの思想を検討することによって、新たな道学史、さらには新たな南宋思想史の記述を目指した意欲作である。

その際、論者が注目するのは、道学者たちの『孟子』解釈である。『孟子』をいかに考えるかが彼らの思想においてどのような意味を持つのか、さらに言うなら、『孟子』解釈の違いが、思想の根源的なところで大きな役割を果たしたことを明らかにしようとする。本論文の重要な特徴は実にここにある。つまり、これまでの朱子など南宋の思想家の研究は、気や理などの諸概念についての各思想家の考えの分析をもとに各自の思想を記述していたが、論者はより根源的な問題にさかのぼって、経書の解釈こそが、彼らの思想の最深部にあり、その違いが各思想家の思想の違いをもたらすと考え、それを各思想家について考察していく。そして、その中で最も重要な経書が『孟子』であることを指摘するのである。これは、これまでの南宋思想史研究においては、ほとんど顧みられていなかったことであり、論者の新しい業績として特に注目すべき点である。

この『孟子』解釈の重要性を説くのが第一章である。ここでは、孔子（即ち『論語』）と孟子との間に存する違いをどのように思想家たちが調整してきたかという、「孔孟一致論」について、古代からの流れを精密に記述しつつ、道学者の孔孟一致論を考察する。論者は、朱子の「性」論を検討することにより、道学者が重視する「道統論」が、それまでの、単純な「『論語』から『孟子』へ」という一方的な流れで考えるのではなく、『孟子』をいかに解釈するかが『論語』の解釈に影響を及ぼす、という構造を持っていることを明らかにし、それが思想家の思想全体の枠組みを決定するということを指摘する。

第二章では、この『孟子』解釈の重要性を考察するために、まず胡宏を取り上げる。そこでは、胡宏の「知先行後」、ならびに「天理人欲が同体異用である」という思想が、胡宏の独自の『孟子』解釈によるものであること、それと同時に、程子の門下は、程子の学説を『孟子』によって補完していることを指摘する。さらに、胡宏と朱子の解釈の違いについて、二人の相違の根底には、いわゆる「未発已発」の解釈の違いがあることを指摘するとともに、それが、『孟子』のどの部分において「未発已発」を考えるかの違いによるものであることを明らかにする。従来は朱子が克服した対象としてのみ語られることの多かった胡宏の思想を詳細に分析することにより、胡宏の新しい側面のみならず、程子門下の学者たちの位置づけにも創見を示している。

続いて第三章では陳亮を扱う。陳亮はいわゆる「事功派」として知られ、朱子と対立する面が強調されるが、論者は、両者が形式上は、義と王道を尊び、利と覇道を低く見るという点では一致し、ただ「義と利の関係」「王と覇の関係」をどう考えるか

という部分での『孟子』解釈の違いが二人の思想の根本的な相違を形成することを明らかにする。このことは、陳亮の思想史上の位置を考える上で重要な指摘であるとともに、従来陳亮は朱子が「陳亮は孟子を否定した」旨の発言をして以来、『孟子』とは対立するものと捉えられてきたが、陳亮は朱子とは異なる『孟子』解釈をしたに過ぎないことを明らかにし、陳亮における『孟子』の重要性を指摘したことも重要な功績と言える。

第四章では、陸九淵を扱っている。ここでは陸九淵の「荊公祠堂記」を綿密に読み込むことによって、道学反道学の争いにおける陸九淵の朱子批判の様相を明らかにする。そこでは、朱陸の論争における陸九淵の主張がこの文章においても投影されていることを指摘し、かつその王安石批判が朱子を意識したものであり、またその朱子を批判する方法が、陸九淵の「本心」思想にもとづくものであることを明らかにする。

第五章では、道学における「道統」に関わる朱子の『資治通鑑綱目』を扱う。従来、朱子の春秋学と『資治通鑑綱目』の内容との間にある齟齬が問題視されてきたが、論者は、朱子は春秋学においては義例説を否定するものの、凡例の存在は認めること、同書の褒貶は、いわゆる「一字褒貶」ではなく、『資治通鑑』などの史書の書法をもとにした凡例にもとづくものであることを指摘し、決して矛盾するものではないことを明らかにする。

以上、本論は随処に論者の新見解、それも南宋思想史を語る上で重要な指摘がなされているが、さらにもう一点注意しておきたい。それは、陳亮と陸九淵について、彼らが必ずしも二程子を尊重せず、孟子の継承者を自任する二程子の立場に自らを据えていることを指摘する点である。即ち、論者の言によれば「二程の学として形成された道学は、二程の批判者をも包摂し、孟子の学として展開した」。これは、道学とは何かということを考える上で、極めて重要な指摘であると考える。

なお、あえて問題点を指摘するならば、それは、論者の考える「経書解釈」の先行性についてである。論者は「経書解釈が思想を形成する」という方向を強調する。もちろん、経書解釈、それも『孟子』解釈が重要であるという指摘はその通りなのだが、「思想の根源」を経書解釈のみに求めることにはいささか躊躇を覚えるのであり、この諸論考をもとに、より総合的に各思想家の全体像を明らかにしていくことが望まれる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、２０１７年１２月４日、調査委員４名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。